

水稲時期別技術対策情報 22-3

平成22年6月18日
新潟県農林水産部

中干しから幼穂形成期までの栽培管理のポイント

- 1 生育過剰を防止し穂肥が施用できる稲姿にするため、中干しを徹底
- 2 中干し終了後から幼穂形成期までは、浅水の間断かん水または飽水管理を実施して、うわ根の発生促進と地耐力を維持

【 生 育 状 況 】

1 作物研究センター気象感応ほにおけるコシヒカリの生育

田植え日	6月15日現在				6月9日現在			
	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	主稈 葉数	葉色 (SPAD)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	主稈 葉数	葉色 (SPAD)
5月6日	33	444	8.5	37.9	27	263	7.2	33.4
前年比・差	95%	93%	+0.2	-0.7	87%	63%	-0.6	-5.4
平年比・差	97%	97%	+0.1	+0.2	90%	74%	-0.5	-3.3
5月11日	30	339	7.9	38.5	25	191	6.3	32.0
前年比・差	105%	112%	+0.3	+1.5	92%	77%	-0.6	-3.5
平年比・差	101%	105%	+0.0	+1.1	91%	74%	-0.8	-4.3

- ・ 6月9日以降生育は回復し、分けつの発生が旺盛である。
- ・ 6月15日現在、5月6日田植えでは、草丈・茎数・葉数・葉色とも平年並、5月11日田植えでは、草丈・葉数は平年並、茎数は平年に比べやや多く、葉色は平年よりやや濃い。

2 県内各地域におけるコシヒカリの生育

(1) 農業普及指導センター気象感応ほにおけるコシヒカリの生育(6月10日調査)

地 域	草 丈			茎 数			主稈葉数			葉 色		
	本年 (cm)	平年比 (%)	前年比 (%)	本年 (本/m ²)	平年比 (%)	前年比 (%)	本年 (葉)	平年差	前年差	本年 (SPAD)	平年差	前年差
下 越	25	95	98	144	72	92	6.3	-0.2	-0.1	28.1	-5.3	-6.7
新 潟	31	100	100	195	87	81	7.2	+0.1	-0.2	34.4	-3.7	-2.2
中 越	30	101	97	183	88	96	6.3	-0.6	-0.4	35.1	-0.9	+1.6
魚 沼	29	104	95	127	64	67	5.9	-0.5	-0.4	29.5	-5.1	-5.4
上 越	26	95	90	152	66	70	6.4	-0.4	-0.6	32.3	-3.8	-5.1
佐 渡	24	85	92	168	82	79	6.5	-0.8	-0.8	31.6	-4.0	-4.4
県平均	28	97	93	162	76	80	6.4	-0.4	-0.4	32.1	-3.7	-3.4

注)・平年値は平成14年から21年までの8か年平均である。

- ・ 気象感応ほの平均田植え日は、新潟・佐渡地域が5月6日、下越・上越地域が5月11日頃、中越地域が5月16日、魚沼地域が5月21日である。

(2) 5月連休植えの調査ほにおけるコシヒカリの生育(6月10日調査)

草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	主稈葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
30	244	7.1	36.0

注)・新潟、新津、巻農業普及指導センター調べ。代表的な6地点の平均値。
・田植日は5月3日前後。
・平均栽植密度は16.1株/m²。

県内各地域における6月10日現在の生育は、作物研究センター(6月9日現在)と同様に、平年に比べて茎数は少なく、葉数の進みはやや遅く、葉色は淡い。しかし、その後の生育は作物研究センター(6月15日現在)と同様に、平年並に回復していると考えられる。

3 地力窒素の発現状況

農業総合研究所ほ場の地温は、6月に入り平年並に回復した。地力窒素発現量は6月10日現在、化学肥料区で平年並、わら堆肥区で前年及び平年よりやや少ない。

地力窒素の発現状況(6月10日、mg/100g乾土、農業総合研究所)

区	本年	前年	平年
化学肥料区	3.1	3.7	3.2
わら堆肥区	3.3	4.0	4.1

4 本年の出穂期予測

(1) コシヒカリの出穂期予測(6月15日現在)

田植後の気温、葉数の進みから本年のコシヒカリの出穂期は概ね平年並と見込まれる。ただし、植傷み等により初期生育が停滞した場合は、予測よりも遅れると考えられる。

(2) コシヒカリ以外の品種の出穂期予測について

コシヒカリ以外の品種は、下表に示したコシヒカリとの出穂期差を参考にして、出穂期を予測する。ただし、田植日を同一とした場合の出穂期差である。

コシヒカリとの出穂期差のめやす(作物研究センターの試験成績から作成)

品 種	日	品 種	日	品 種	日
わせじまん	- 1 4	五百万石	- 9	ひとめぼれ	- 6
越路早生	- 1 0	わたぼうし	- 8	ゆきの精	- 5
トドロキワセ	- 1 0	ゆきん子舞	- 8	こがねもち	- 3
あきたこまち	- 1 0	こしいぶき	- 7	越淡麗	+ 6

【 技 術 対 策 】

1 生育調節による生育過剰防止

- (1) 6月15日現在、生育は平年並に回復しており、多くのほ場は中干し適期に達していると思われる。中干しに入っていないほ場は速やかに落水して溝切りを実施し、生育調節を徹底する。
- (2) 6月中旬から幼穂形成期にかけては、根が下層に伸長して根圏を拡大する時期であることから、茎数が中干しの目安に達しない場合でも、6月20日頃には中干しを開始する。
- (3) 既に溝切りを実施したほ場においても、溝が浅く中干しが不十分なほ場は、再度溝切りを行い、中干しを徹底する。
- (4) 中干し終了後から幼穂形成期までは、浅水の間断かん水または飽水管理を実施して、うわ根の発生促進と地耐力の維持等に努める。

2 穂肥の対応

- (1) 6月15日現在、コシヒカリの出穂期はほぼ平年並と予測される。ほ場間における生育の遅速差が大きいことから、ほ場での幼穂確認を的確に行い、穂肥の適期施用に努める。
- (2) 幼穂形成期は気温の高低によって変動するので、今後の気象経過に留意する。
- (3) 平成20年、21年と、倒伏が大きく品質低下を招いた地域があった。コシヒカリの生育過剰が懸念されるほ場では、適正粒数(㎡当たり2万8千粒)を大きく超えないよう、地力窒素の発現状況等を踏まえ、穂肥時期及び施用量の診断を的確に行う。

3 病害虫防除

(1) 葉いもち

- ア 6月14日現在、本田初発は確認されていない(平年値6月28日)。
- イ 補植苗の発病は、現在確認されていない。葉いもち発生量は平年並の少発生と見込まれるが、補植苗を放置しているほ場では、直ちに除去する。
- ウ プラストム(葉いもちの予測システム)では、6月16日に感染好適条件が出現しているため、今後の発生予察情報に注意する。
- エ いもち病多発生地域におけるコシヒカリBLで、育苗箱施用剤や側条施用剤による葉いもち防除を実施していない場合は、直ちにオリブライト1キロ粒剤を散布する。
- オ わたぼうし等、いもち病に対する抵抗性が弱い品種を作付けたほ場や、大豆跡等で生育が過剰になることが予想されるほ場において、予防粒剤を施用していない場合には、直ちにオリブライト1キロ粒剤を散布する。また、予防粒剤を施用しても、その後の気象条件によっては発病することがあるので、随時ほ場を観察し、発病が認められた場合には直ちに茎葉散布剤を用いて葉いもち防除を行う。

(2) 斑点米カメムシ類

- ア 発生時期・発生量とも平年並と見込まれるので、今後の発生予察情報に注意する。
- イ 斑点米カメムシ類の増殖地をなくし、密度を抑制するため、農道・畦畔等の雑草防除を徹底する。草刈りは、雑草が結実しない間隔(およそ3週間)で行う。地域一斉の草刈りは、6月中旬~下旬と7月中旬~下旬の2回とする。

4 コシヒカリ湛水直播のポイント

- (1) 中干しは7葉期頃(6月中旬)を目安に開始し、移植栽培よりも強めに行う。
- (2) 水稻栽培指針に掲載されている苗立ち数に応じた幼穂形成期の生育指標を参考にして穂肥診断を行い、1回目の穂肥時期が早すぎないように幼穂を必ず確認して施用する。

【照会先：経営普及課普及指導員(専門技術指導担当)水沢副参事 TEL 025-280-5302】